

## 御国の民の歩み(4)「聖なるものを求め続ける」

【聖書箇所】 マタイの福音書 7章 6～12節

### ベレーシート

●山上の説教について多くの研究者がその構造を明らかにしようと試みています。その一つに「キアスムス構造」があります。中澤啓介師はそれについて、以下のようにまとめています(「マタイの福音書註解(上)」598～599頁)。

- A: 序論 「御国の民の特権」(5:3～16)
- B: 主部の序 「律法を確立することの重要性」(5:17～20)
- C: 御国の義 「律法の伝承の中で」(5:21～48)
- D: 義の業の最初 「施し」(6:1～6)
- E: 義の業の中心 「主の祈り」(6:7～15)
- D': 義の業の最後 「断食」(6:16～18)
- C': 御国の義 「神に対する信頼の中で」(6:19～7:11)
- B': 主部の結語 「律法を確立するための原理」(7:12)
- A': 結論 「御国の民への招き」(7:13～27)

●「キアスムス構造」とは「交差配列法」という修辞法で、聖書の解釈法の一つです。

<https://saiwai.net/pdf/ChiasmusIntro.pdf>を参照のこと。今回取り上げる箇所(7:6～11)は、上記の構造からすると、C'の「御国の義」の中にあります。CとC'の共通項はそれぞれ六つの事柄を含んでいるということです。そして、御国の民がそれらに対してどのように考え、どのように生きるべきかを教えているということです。つまり、Cでは、「殺人」「姦淫」「離婚」「誓い」「報復」「敵への愛」という六つの律法のユダヤ的な解釈(=口伝律法)に対して、御国の民がどのように考えるべきかを明らかにしています。C'では、「宝」「目」「思い煩い」「さばき」「価値認識」「熱心な求め」という六つの事柄について、御国の民がどのような生き方をしたら良いのかを明らかにしています。

●前回(7:1～5)は、自分の目の中に「梁」があるにもかかわらず、それに気づかずに相手の目の中にある「ちり」(木屑)を取ろうとする偽善者たちに対して、「さばいてはならない」とイエシュアは教えました。当時の宗教指導者たちは本来の神の律法の本質から外れたさまざまな戒めや命令、禁止や罰則を伴う口伝律法(タルムード)をつくり、人々を束縛し支配する手段としていました。五十歩百歩という言葉があるように、だれにも守れない多くの口伝律法によって人々を監視してさばいていたのです。「梁」とは「口伝律法」のことを指しているのです。その「梁」を自分の目から取りのけるなら、健全な目を取り戻し、その

ことで相手の目の中にある「ちり」をも取り除くことができるとイエシュアは言われました。これは、人間が造り出したさまざまな規則をもって互いにさばきあうことをせず、むしろ本来の神の律法の真意を知るべきことをイエシュアはさとしていると言えます。

●それに続いて、今回は7章6節にある「聖なるもの」の扱いと、7～11節にある「熱心な継続的な求め」、および、12節にある「律法を確立するための原理」(黄金律)について取り上げたいと思います。

## 1. 聖なるものを犬や豚に与えてはならない

【新改訳改訂第3版】マタイの福音書7章6節

聖なるものを犬に与えてはいけません。また豚の前に、真珠を投げてはなりません。それを足で踏みにじり、向き直ってあなたがたを引き裂くでしょうから。

●この箇所はイエシュアのことばの中でも、2を3で割るような、最も理解しにくい一つとされています。これまでなされてきたいくつかの解釈を紹介すると、以下のようになります。

### (1) 排他的な解釈

●キリスト教の信仰の純粋性を維持するための排他的教えであるとする解釈です。これはA.D.100年頃の「ディダケー」と呼ばれるキリスト教会最初の礼拝式文の中に、「主の名によってバプテスマを受けた者以外は主の晩餐(=聖餐式)でパンを食し、ぶどう酒を飲んではいけません。主はこの点について『聖なるものを犬に与えるな』と言われているからである。」とあります。あるいは、マタイ7章6節が「すでに選ばれている者とそうでない者があることをはっきりと示している箇所」として理解されました。

### (2) 逆説的解釈

●7章6節のみことばを、反語的に翻訳しなおすと、「あなたがたは聖なるものを犬に与えるようなことはしないだろう。また、豚の前に真珠を投げてやることはしないだろう。ましてや神だってそんなことはしないはず」という解釈です。神があなたがたに御国を与えておられるのは、あなたがたを犬とも豚とも見ておられないからである。だから、自分は犬のようだ豚のようだと自らを卑下し、自分に絶望している者に対して、イエシュアは絶望してはならないと教えているのだと解釈します。

### (3) 文脈的・構造的解釈

●6節のことばの、「聖なるもの」と「真珠」は同義です。また「犬」と「豚」も同義です。「与える」と「投げる」も同義です。「踏みにじる」と「引き裂く」も同義です。とするならば、それぞれが指し示して

いるものは何でしょうか。

①「**聖なるもの**」「**真珠**」とは「**御国の福音**」のことです。なぜなら、イエシュアは「御国の福音」を宣べ伝えるために来られたからです。

②「**犬**」と「**豚**」とは、「**御国の福音**」の**価値を知らない者たち**のことです。コンテキストから考えるなら、その実態は7章1～5節で語られた「偽善者たち」と解釈できます。「犬」も「豚」もここではいずれも複数形です。御国の福音である「聖なるもの」(単数)と、それを象徴する「真珠」に例えられた数々の宝(複数)の価値を知らずにいる者たちは、それを理解しようとはせず、それを「**踏みにじり**」、それを与えようとする者たちを「**引き裂こう**」とするのです。それゆえイエシュアは「聖なるものを犬に与えてはいけません。また豚の前に、真珠を投げてはなりません。」と言われたという解釈です。つまり、永遠に価値あるものについて無感覚な者たちに対して、御国の民がどのように対処すべきかを教えているという解釈です。

●この解釈は現実に即したいわば醒めた見方です。ジョン・ウェスレーは、この聖句は信じ始めた頃の興奮さめやらない人々には、特に必要な警告だとしています。私たちが神の宝である「福音」を伝え、与えようとしても、すべての人がそれに応じるわけではないからです。ある者は応じ、ある者はそれを軽蔑し、耳を傾けようとしぬ現実を受けとめなければならぬからです。私もそうでしたが、この私が信じたのだから、他の人だって信じ受け入れられるはずだと思い、一生懸命、自分の救いのあかしの話をしました。友人や親戚や、周囲の人々に福音を伝えたいという純粋な気持ちから熱心にそうしたので。一生懸命に話せば分かってもらえる、信じてもらえると考え、人を見つけてはそういう話題に話を持っていきました。ところが純粋な気持ちにもかかわらず、相手から拒絶されて、不成功に終わってしまう経験を重ねてしまうと、逆に、心が折れて伝道したくなくなってしまうのです。自分のことをだれにも理解されなかったようにひどく心が傷ついてしまうのです。伝道に励めば励むほどそのことを嫌というほどに思い知らされるのです。

●イエシュアも弟子たちを遣わす時にこう言われました。

【新改訳改訂第3版】マタイの福音書 10章 11～14節

- 11 どんな町や村に入っても、そこでだれが適当な人かを調べて、そこを立ち去るまで、その人のところにとどまりなさい。
- 12 その家に入るときには、平安を祈るあいさつをしなさい。
- 13 その家がそれにふさわしい家なら、その平安はきっとその家に来るし、もし、ふさわしい家でないなら、その平安はあなたがたのところに返って来ます。
- 14 もしだれも、あなたがたを受け入れず、あなたがたのことばに耳を傾けないなら、その家またはその町を出て行くときに、あなたがたの足のちりを払い落とすなさい。

●特に、14節の「足のちりを払い落とす」という行為は、「相手との関係を断絶すること」を意味するだけでなく、神ののろいがそこに残されるということも意味するのですが、いずれにしても、イエシュアご

自身がその心の痛みを最大限に経験された方です。「聖なるもの」、その象徴である数々の真珠という宝のすばらしさに心が捕らえられなければ、御国の福音を宣べ伝える働きは到底できないのです。そこから、次の話につながっていきます。

## 2. 「聖なるもの」を得るために、熱心に求め続けよ

【新改訳改訂第3版】マタイの福音書 7章 7～8節

7 求めなさい。そうすれば与えられます。捜しなさい。そうすれば見つかります。

たたきなさい。そうすれば開かれます。

8 だれであれ、求める者は受け、捜す者は見つけ出し、たたく者には開かれます。

### (1) 命令と約束

●7節と8節は同義的パラレリズムです。同じ内容が再度、言い直されて、意味が強調されています。それぞれのことばの原語は以下の通りです。ちなみに、英語では、「求める」が Ask, 「探す」が Seek, 「たたく」が Knock で、それぞれの頭文字をつなぐと **ASK** となります。つまり、「求める」ということばで全体を代表させることが可能です。これら三つの動詞は、神が御国の民に求めておられるとても重要な姿勢です。これらの命令に従わなければ、御国の宝の価値を知ることはできないのです。そこでこれから、これら三つの言葉をより深く自分で調べられるように、ギリシア語とヘブル語を表記しておきたいと思えます。

#### 命 令

●以下の三つの動詞はすべて渴望用語です。御国の民にとってきわめて重要な語彙です。

①「求める」のギリシア語は「アイテオー」(αἰτέω)。「要求する」という意味もあります。新約での使用頻度は70回。これに相当するヘブル語は二つあります。ひとつは「シャーアル」(שָׁאַל)、もうひとつは「ダーラシュ」(דָּרַשׁ)。

②「探す」のギリシア語は「ゼーテオー」(ζητέω)。「尋ね求める、追求する」という意味もあります。新約での使用頻度は117回。ルカ19章1～10節にあるザアカイとイエシュアの出会いには人と神との二つの「ゼーテオー」がぶつかっています。これに相当するヘブル語は「ハーファス」(חָפַס)。

③「たたく」のギリシア語は「クルーオー」(κρούω)。こぶしで戸をたたくという意味で、使用頻度は9回です。これに相当するヘブル語は「ダーファク」(דָּפַק)。

#### 約 束

●神の命令には、それに伴う約束として、「必ずそうなる」ことの確実性が保証されています。

- ①「**受ける**」のギリシア語は「ディドーミ」(δίδωμι)。ヘブル語は「ナータン」(נתן)。
- ②「**見出す**」のギリシア語は「ユーリスコー」(εὕρισκω)。ヘブル語は「マーツァー」(מצא)。
- ③「**開かれる**」のギリシア語は「アノイゴー」(ἀνοίγω)。ヘブル語は「パータハ」(פתח)。

●これら三つのうち①と③は未来形の受動態ですが、②は未来形の能動態です。このことが意味していることは、「見出す」とは、隠されている宝を捜し出して見つけ出す人の主体性の重要性が示されているということです。

●8節には「だれであれ」とあります。ここは「すべて」を意味する「パス」(πᾶς)があり、「例外なく、必ず」という意味です。「求めなさい。そうすれば(必ず)与えられます」というのは実に奇跡の世界です。なぜなら、それは「**確実性の世界**」だからです。求め続け、捜し続け、たたき続けるならば、必ず、新しい発見と驚きと喜びが与えられる世界だということを意味します。いのちの躍動がその人自身の心の最も深い所から湧き出て来るのです。御国とは、喜びの源泉が私たちの外側にあるのではなく、私たちの内側にあるために、決して退屈な生活とはならない世界なのです。私たちの内からいのちの水が、生ける水の川が流れ出るような世界であり(ヨハネ 7:38)、それによって被造物全体が活気づく世界です。そこは常に刷新されていく驚くべき世界なのです。それゆえ、私たちが考えるような意味での退屈さなどはありません。ダビデはそのような世界が地上に実現することをすでに預言していました。

【新改訳改訂第3版】詩篇 16 篇 9～11 節

- 9 それゆえ、私の心は喜び、私のたましいは楽しんでいる。私の身もまた安らかに住まおう。
- 10 まことに、あなたは、私のたましいをよみに捨ておかず、あなたの聖徒に墓の穴をお見せにはなりません。
- 11 あなたは私に、いのちの道を知らせてくださいます。あなたの御前には喜びが満ち、  
あなたの右には、楽しみがとこしえにあります。

## (2) 約束の根拠

●なにゆえに「求め続けるなら、受け取ることができる」のでしょうか。なにゆえに「捜し続けるなら、見つけることができる」のでしょうか。なにゆえに「たたき続けるなら、開かれる」のでしょうか。それは、天の父がその子どもたちに良いものを与えることを何よりも喜びとされる善なる方だからです。そのことをイエシュアは以下のように語っています。

【新改訳改訂第3版】マタイの福音書 7 章 9～11 節

- 9 あなたがたも、自分の子がパンを下さいと言うときに、だれが石を与えるでしょう。
- 10 また、子が魚を下さいと言うのに、だれが蛇を与えるでしょう。
- 11 してみると、あなたがたは、悪い者ではあっても、自分の子どもには良い物を与えることを知っているのです。  
とすれば、なおのこと、天におられるあなたがたの父が、どうして、求める者たちに良いものを下さらないことがありましよう。

●ここには地上の父と天の父が類比を用いて語られています。つまり、地上の人間の父(たとえ悪い父)であつても自分の子どもには良い物を与えるとするならば、天の父がなおさらに自分の子に良い物を与えるのは当然だということです。このことは当時の人々にはきわめて画期的な教えであつたろうと推測します。というのは、それまで、言い伝えられた口伝律法に従わなければ祝福されないと教えられていた人々にとって、御国の福音の教えでは、イスラエルの神は善いお方であり、自分の子には最も良いものを与えたいと願っておられる父であると教えられたからです。ここでの「良いもの」について、マタイはそれが何かを記していませんが、ルカはそれが「聖霊」であるとしています(ルカ 11:13)。「聖霊」は「御国の福音」をこの地上に目に見えるかたちで実現させるために、なくてはならない神からの賜物なのです。それゆえ、「御霊に逆らう冒瀆は赦されない」のです(マタイ 12:31)。聖霊に逆らう者が、犬や豚にたとえられるのはそのためです(ピリピ 3:2、黙示録 22:15、マタイ 8:31~32)。

### 3. 黄金律と呼ばれる神の「律法」—それは恵みの分かち合いの世界

【新改訳改訂第3版】マタイの福音書 7章 12節

それで、何事でも、自分にしてもらいたいことは、ほかの人にもそのようにしなさい。これが律法であり預言者です。

【新改訳聖書 2017】マタイの福音書 7章 12節

ですから、人からしてもらいたいことは何でも、あなたがたも同じようにしなさい。これが律法と預言者です。

●今回の最後の箇所として、「黄金律」(Golden rule)と呼ばれる 12 節のことばを味わってみましょう。12 節には「それで」「ですから」と訳された接続詞(「ウーン」 οὕτως)がありますから、当然その前の文脈(7~11 節)を受けて語られたものです。とすれば、「自分にしてもらいたいこと」、「人からしてもらいたいこと」の「してもらいたいこと」とは何でしょうか。それは「良いものを与えられたい、受けたい」ということです。

●なにゆえに「黄金律」と呼ばれているかと言えば、12 節にある教えは、多くの宗教、道徳や哲学でも見出されるものだからです。750 年頃、ローマ皇帝がこの聖句を金で彫刻し、壁に掲げていたと言われていいます。またそれから 1000 年後にジョン・ウェスレーがこのフレーズから「黄金律」という説教をして以来、この言葉が有名になったとも言われています。

●神が人に、人が神に対しても人に対しても、良いものを与え合うこと。これが「黄金律」です。この黄金律をイエシュアは二つのことばで言い表し、「心を尽くし、精神を尽くし、力を尽くして、主を愛する」とも、「あなたの隣人を自分のように愛しなさい」とも表現しています。それは同時に、その逆である「自分にしてもらいたくないこと」は「相手にもしない」ということを含んでいます。

●「律法と預言者」とは何でしょうか。それは「旧約聖書全体」を意味します。つまり、神の律法(「トーラー」 תּוֹרָה)である「みおしえ」の中心は、イエシュアが二つのことばで要約したように、神を愛するこ

と、そして隣人を愛することです。この愛の二本柱こそが御国を特徴づけるものであり、御国が御国であるために必要不可欠なものなのです。これを天の父は私たちに与えようとしておられるのです。

●7節の「求めなさい。そうすれば与えられます。捜しなさい。そうすれば見つかります。たたきなさい。そうすれば開かれます。」というイエシュアのことばを人一倍経験した人がいます。それは使徒パウロです。それゆえパウロは他の弟子たちにまさって多くの天の奥義を啓示されました。そのパウロがエペソの教会の長老たちに対して語った訣別説教の中で次のように言っています。

【新改訳改訂第3版】使徒の働き 20章 35節

このように労苦して弱者を助けなければならないこと、また、主イエスご自身が、『**受けるよりも与えるほうが幸いである**』と言われたことばを思い出すべきことを、私は、万事につけ、あなたがたに示して来たのです。』

●使徒パウロは歴史上のイエシュアに会ってはいませんが、「**受けるよりも与えるほうが幸いである**」ということばはイエシュアからの直接的な啓示によるものであったと考えられます。なにゆえに、受けるよりも、与える方が幸いなのでしょう。それは旧約聖書が指し示している「黄金律」を成就することになるからです。事実、イエシュアが「天の御国が近づいた」という福音を宣べ伝えるように弟子たちを遣わされたとき、こう言われました。「**あなたがたは、ただで受けたのだから、ただで与えなさい。**」(マタイ 10:8)と。これこそ使徒パウロが「**受けるよりも与えるほうが幸いである**」と言ったことの源泉です。良いものを人に与えることができるためには、その人がその良いものを常に神から豊かに受け続ける必要があります。この生き方こそ、御国の民としての歩みなのではないでしょうか。

●それゆえイエシュアが言われたことばを再度、心に留めて、神から与えられる良いものを求め続け、探し続け、たたき続けなければなりません。

【新改訳改訂第3版】マタイの福音書 7章 7～8節

7 求めなさい。そうすれば与えられます。捜しなさい。そうすれば見つかります。

たたきなさい。そうすれば開かれます。

8 だれであれ、求める者は受け、捜す者は見つけ出し、たたく者には開かれます。

●また、イエシュアが「多く与えられた者は多く求められ、多く任された者は多く要求されます」(ルカ 12:48)と語ったように、神からの良いものを受け取るのは、それを人々に無償で与えることができるためです。こうした「恵みを分かち合う」生き方こそ、天の御国の民としての責任ある生き方なのではないでしょうか。最後に、パウロの勧めのことばを記します。「**私の神は、キリスト・イエスにあるご自身の栄光の富をもって、あなたがたの必要をすべて満たしてください。**」(ピリピ 4:19)

2017.12.03